
睡蓮の花

睡蓮堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

睡蓮の花

【Nコード】

N9970Y

【作者名】

睡蓮堂

【あらすじ】

ある日、ある時、ある瞬間。彼女は原因不明の病でこの世を去り、次に目覚めた時に見たのは褐色の肌に赤い髪をした美しき女神・ユーフェリアだった。

ユーフェリアの力によって彼女・冴木漣は異世界ユーフェリアにある国の一つ、黄昏の国ノクティスへと落とされる。輪廻の輪から外れ、転生の軸から外れた彼女の運命は？

世界観、登場人物詳細など

世界観

中世ヨーロッパの街並み酷似した風景の広がる魔法世界。科学という概念がなく、それ故現代世界のような高層ビルや自動車の類が存在せず、科学のすべてが魔法に代替えされたような世界である。また、人間以外の種族が存在し、種族によってその特色が大きく変わる。

国・地域・地名

夜の国 ノクティス ユーフェリアに存在する安らぎと夜の国。一年を通して常に太陽が昇らない国で、日中でも夕暮れのような暗さをして
いる。

ルーナルーメン・ウルプス《月光の都》 ノクティスの王都。
人口およそ5万人をもち抱える大都市であるとともに、王の居城がある王都。

星の海 ステラ・マレ ナイトレイン王家の別城が避暑地。高原の一画に建てられた石造りの城で、夏の夜には無数の星々が見られることからステラ・マレと呼ばれている。

その他

ールキドウス・アルプス・フロース《光り輝く白い花》 ユーフェリア全土に古より伝わる伝承に重畳する聖なる乙女の事。諸説があるものの、一説にはこの光り輝く白い花が創生神ユーフェリアに選ばれた異世界の人物で、その身体はどこかに花の証であるユーフェリアの聖痕があり、嫁ぐ事でその者に莫大な英知と富をもたら

すと言われている。

通貨・物価

通貨は通貨はすべて硬貨であり紙幣通貨は存在しない。黄銅貨、赤銅貨、銅貨、青銅貨、銀貨、金貨、白金貨となっている。交換レートは黄銅貨10枚⇨赤銅貨、赤銅貨10⇨銅貨、銅貨10枚⇨青銅貨、青銅貨20枚⇨銀貨、銀貨50枚⇨金貨、金貨100枚で白金貨となる。諸国、地域により差はあるもののノクティス王国は概ね安定している。両親+子供二人家族の平均収入がおよそ銀貨2枚と青銅貨10枚であることに對し、リンゴ一個が約赤銅貨9枚⇨銅貨1枚。一回の外食が銅貨8枚⇨青銅貨1枚ほどと概ね日本と変わらない。

移動・交通

乗合馬車 ルーナルーメン・ウルプス内を循環する庶民の足。王都や大きな町には必ずある。一回の乗車賃が銅貨1枚と安値なことから、大都市に住む庶民には欠かせないものとなっている
長距離馬車 都市や街を繋ぐ馬車。主に冒険者や商人が利用するものの乗合馬車と違い、個人で借りる事が多いため値段は高い。
飛竜車 主に貴族が好んで所有する移動手段。飛竜と呼ばれる小型の竜を飼いならし、客車を引かせている。馬車に比べスピードがかなり早い。

天馬車 貴族や王族がその優雅さから好んで所有する。文字通り天馬に客車を引かせたもの。

登場人物

冴木漣さえぎれん (20) 突然王城に現れた異世界の女性。ユーフェリアに

伝わる伝承になぞらえ王の花嫁として、王城の妃の間に置かれる。艶やかな黒髪と黒曜石のような瞳をした麗人。当初、元の世界に戻りたいと強く望んでいたが、王城の人間と交流を持つうちに迷いが出始める。

アベル・ナイトレイン（25） 異世界ユーフェリアにあるノクテイス王国の若き王。月の光のような銀髪と冬の湖色の瞳を持った白暫の麗人。国民たちからは心優しく賢王と讃えられる反面、内外に問わず己に反する者には容赦ない報復を与える冷酷な一面も持つ。幼い頃から聞き親しんだ物語の登場人物である”次元渡りの少女”の瞳と髪をしたヒロインに心奪われる。

ユーフェリア 自らの名を冠した世界の創生神とあがめられる女神。次元の彼方より、ヒロインをノクテイス王城に送り込んだ張本人。褐色の肌と紅茶色の髪が印象的な美女。

フリードリヒ・ウエルネス（27） アベルの乳兄弟として育った美貌の青年。濃い茶色の髪と瞳をした美丈夫で王宮内の将来有望株。爵位こそ子爵と低い物の、その明るさと冷静さ、真面目さで貴族のご令嬢や侍女の間で人気を誇っている。アベルの無茶な行動をいつも気に掛ける苦勞人。王族の敬語を一手に担う近衛省長官

ジークフリード・マクスウエル（8？） 一線から退いた元宰相でありマクスウエル公爵家の当主。齡80歳を過ぎた老齡で一見、どこにでもいる好々爺のように思えるものの、賢者と綽名される頭脳と手腕は未だ健在。アベルが逆らえない人物でもある。ジークフリードが一線を退いて後、未だ宰相の席は空席とされている。

クリフォード・メイスン（28） ジークフリードの最後の弟子にして稀代の天才と称される魔術省兼神殿省長官。魔術省の本部であ

る魔術塔にこもりがちな研究者だが、アベルが何か問題を起こすた
びに引つ張り出されている。普段はどこまでも穏やかな中世的な美
貌の持ち主だが、一旦怒らせると凄惨な仕返しをされると内外にお
それられている。メイスン伯爵家の二男。

セシリア・コネリー（31） ヒロイン付きの侍女頭。自分を飾る
事に興味を示さないヒロインを飾りたてる事に生きがいを感じる温
和な女性。普段はどこまでも穏やかで柔らかな女性だが既に3児の母
であるという面から、怒らせるととても怖い。ヒロイン付きの近衛
兵オーガスト・コネリーの妻。

アディ・ピアソン（22） ヒロイン付きの侍女。セシリアと同じ
くヒロインを着飾らせる事に使命感を感じる侍女。一見、気が強く
少年のように見えるが、幽霊や死霊などの怪談噺が大の苦手という
女性らしい一面もある。実家は帝都一と言われる高級料理店。

キャリア・オドネル（21） ヒロイン付きの侍女。侍女の中では
一番紅茶を容れるのがうまく、ヒロインやアベルの給仕係りとなっ
ている。実家が街中の紅茶茶葉専門店を開いていることから、宿下
がりの際は必ずお土産と称して珍しい茶葉を持ってくる。

エイダ・ネルソン（21） ヒロイン付きの侍女。落ち着いた性格
から実年齢より年かさにみられる事が多く、内心そのことを気にし
てはいるものの面には出さない。思量深く物静かな正確から、四人
の侍女の中ではまとめ役になることが多い。両親を早くに亡くし、
現在は帝都で古書店を営む祖父と二人家族。

アシユリー・メイヤ（18） ヒロイン付きの見習い侍女。王宮に
入ってまだ日が浅く、歳も若い事からやや軽量なところがあるもの
の、持ち前の明るさと人好きする性格で藍玉の間のムードメイカー

となっている。実家は布製品を専門に扱う貿易を営む商家で、布や生糸に詳しい。

オーガスト・コネリー（35） 王族の警備を一手に担う近衛省勤務の兵士。役職は第一小隊隊長だが、本人曰く過分な引きたてらしく未だ一平卒の兵士と同じ訓練をこなす。勤務中はあくまで寡黙に警備にてっしているが、家に帰れば子煩悩な普通の父親。セシリアの夫。

コンラット・マクベス（23） 近衛省勤務の兵士。若くして第二小隊を担う隊長であるが、その中世的な容姿と女性至上主義から軟派と言われることが多い。オーガストとは全く正反対の性格をしているがなぜか気が合うらしく、プライベートでもオーガストの家にちよくちよく顔を見せる。意外に子供好き。ヒロインの警護に自ら志願した。

絶望と神様

(落ちる!!!!)

そう思った瞬間、彼女の身体は転落防止の柵を乗り越え宙に投げ出されていた。が、不思議と彼女の裡に死への恐怖や、悲しみなどはなかった。代わりに、彼女の裡に浮かぶのは、未だ見ぬ神への真摯なる願いだ。

(これでいい、これでいいのだ。ねえ、神様。私の命を捨てるから、その代りあの人の運命を変えてあげてください。あの人は、私と違ってまだまだたくさんの人に必要とされる人だから……)

「その願い、聞き届けましょう……」
「え……?」

引力に引かれながら願う彼女の耳に、ふと聞こえてきたのは優しい女性の声だった。

「その願いは私が叶えましょう」

「え？」

どこから聞こえてくるのか分からずに、戸惑う彼女が恐る恐る瞼を開く。彼女の視界に映ったもの、それは白い霧のようなものがかった、広い空間だった。

(ああ……………ここがああ世ってところなんだ。変なの、私は自殺だから地獄に行くと思ったのに)

ぼんやりと果てない空間を眺めながら、なんとなくそう考えた彼女は、ふと足元に視線をやった。ふわふわと感じる浮遊感。自分は浮いているのだろうか？

いや、違う。誰かに支えられているのだ。背に回されたのは、褐色の綺麗な手だ。

「……………あなたは、誰？」

「私はユーフェリア。女神ユーフェリア」

「女、神さま？」

褐色の肌に、上品にいれた紅茶色の髪をした美女は、小さく微笑んだ。

「正確には、この世界の神ではありません。こことは違う、別の世界の神……ですが、あなたの願いは私が聞き届けます」

「ほん、とっくに?」

「ええ、その代りあなたにはやってもらいたことが……」

「……………」

「私が創った世界がユーフェリアを滅亡の危機から救ってください」「救う……………」

彼女の背から手を離れた女神・ユーフェリアが小さく頷く。

「あなたのその澄んだ心があればきっと世界は救われる」

「で、でもっ、あなたは女神さまなんですよね!?あなたが創った世界なんですよね?だったら」

彼女の言いたい事が分かったのか、一瞬、ユーフェリアは悲しげな表情を見せる。が、それもすぐに先ほどまでの優しげな表情に戻ると、そっと人差し指を自身の唇の前に立てる。

儂げな美女のように見えて、実は茶目っ気のある人なのかもしれない。

「それはできないの。私たち神が人の世界に手を出すことは禁じられていますが。私たちにも規定ルールがあるのです。ですが、きっかけを与えることはできます……あなたは”女神の御子”として世界に確変をおこすのです……」

「”女神の御子”？」

「そう、あなたは御子。我が愛し子よ、世界を、彼をお願いします。彼の名はアベル」

刹那、彼女の身体は深い闇に飲み込まれた。

冷めた麗貌

女神ユーフェリアを創生神とする世界、ユーフェリアの北方にその国はあった。黄昏と安らぎの国ノクティスは、常に闇に染まった国だった。日中でも陽が昇ることはなく、常に陽の入りのような薄暗さを保つこの国には長い歴史の中でも稀に見る賢王に治められていた。

卓越した政治手腕、見る者が皆類を染める美貌、冷酷なまでの決断力。王の名はアベル・ナイトレイン。建国より数千年、代々ノクティスを治めてきたナイトレイン王家の直系王だ。

『陛下、どうかお聞き届け下さい!!』

各省の責任者である長官・副長官たちとの月に一度の定例報告会を終わらせ、残った仕事を片付けようと執務室に向かう途中、長官の一人に相談があると言われ今現在、執務室で対面しているのだが。

先程から無言を通すノクティス王、アベル・ナイトレインを前に内務省長官である男は焦り、更に言葉を重ねていく。

『陛下、私は何も今すぐここで御子を成してくださいと申しておるのではありません!!しかし、陛下が後宮を持たれて数年、あまりにもお通いがありませんか……陛下、御子は後宮を持って

ばできるといふ訳ではありませんぞ？陛下にお通いいただき、事を成していただきませんと……今、後宮におられる姫君方は大層お心を痛めておいででございます。それも、ひとえに陛下の丘酔いがなためでございます。後宮に通い、御子を成していただくのも陛下の立派なお勤めですぞ！現在、後宮にいらっしゃる姫君がお気に召さないというのなら、我が姫を後宮に上げることやぶさかではございません』

そう述べるると男は深々と頭を下げた。

緊張し、焦る気持ちから少々早口になってしまったが、言いたいことは述べた。後は主の是と言う言葉を待つのみだ。

そんな様子を見て、皇帝の後ろに立つ近衛省長官は笑いを堪え、顔を崩さないようにするのに必死だった。

(結局は、自分の娘を、か……………)

ニヤニヤと笑いたいのを必死で抑え、王の言葉に集中する。

『なるほど、卿のいう事も至極もつともだ。だが、あえてここで問おう…卿は余の治世では不安だと？』

『はっ？いえ、決してそういうわけでは……………』

グラハムは青ざめ王の執務机に額を打ち付けんばかりに平伏した。後宮に娘を送りこみ、一度でも娘が寵愛でも受ければ、それだけ

で王宮内でのグラハムの権力は絶大な物になる。

そんなあさましい考えからの発言であったが、このままでは権力が増すどころか不敬罪で投獄されかねない。

慌てて言葉を取り繕うグラハムを前に、アベルの気配が変わる。それにいち早く反応したのは、アベルの背後に立っていた近衛隊長官でありアベルの乳兄弟でもあるフリードリヒ・ウェルネスその人だ。

『陛下……………』

フリードリヒの呼びかけに、アベルは心得た様子で片手を上げた。

『さて、卿の話はよくわかった。余の伴侶うんぬん、後宮への態度の改めについては余もそれなりに検討しよう』

『は、はっ、差し出がましい口をききましたことお許し下さい!!』

恭しく一礼したまま後ずさる財務長官が消えたのを確認して、アベルはホッと椅子に背を預けた。

『アベル…………お前、魔力出し過ぎだって……………』

『ふんっ、ああいう輩にはあれぐらいせねばわからぬだろう。部屋

に戻る』

『失礼しました。執務はいかがなさいます、陛下？』

『他者がいない席でお前にそう呼ばれるのは気色悪いもんだ。特に急ぎの要件もない、明日で十分間に合う』

それだけ言うとアベルは立ち上がり、ドアノブに手をかける。慌てて主の背を追う近衛隊長官の背にはそこはかかない疲れが出ていたのは仕方ない事なのかもしれない。

ややあつて、到着した国王の私室は広大な王宮の最上階の最奥にある部屋だ。ドアを開けようとドアレバーに手を伸ばしかけたフリードリヒの手をアベルが制す。

『いかがなさいました、陛下？……………っ！？』

ふと、あるはずのない人の気配にフリードリヒは息をのんだ。アベルに扉から離れる様視線だけを躲すと、フリードリヒは一気にドアを引き室内へと転がり込んだ。

薄暗い室内でフリードリヒに剣先を突き付けられていたのは、身体のラインが透けるような感応的な夜着を纏った女だった。

「へ、陛下……私はただ、一夜の御情けを戴こうと……っ」

青ざめ、狼狽した顔色で女は国王に訴えかけた。傲慢で愚かな貴族の娘は自分の美しさに慢心しているのだろう。が、目の前の白皙の美貌を持つ国王には、まさに取るにたらないことだった。

『剣をひけフリードリヒ』

主の命に従い、フリードリヒが剣を収める。美貌の王もやはり男だったのか？そんな思いが女の脳裏をかすめた。そして、女はようやく自分の愚かさを思い知ったのだ。

あろうことが、何を勘違いしたのか女はアベルの頬に手を伸ばす。刹那、薄闇の中に白刃がひらめいた。

「きゃあああああああああ……!!」

空を切る様な女の悲鳴の後、ぼたぼたと嫌な音と共に赤黒い液体が絨毯に溜る。

アベルが女の右腕を切り落としたのだ。

泣き叫ぶ女に掛けられた声に、フリードリヒは内心ブルリと震えた。

『フリードリヒ、この女を地下牢へ投獄しろ!!今すぐだ!!』
『はっ、しかし陛下罪状は……………』

『国王の居室への不法侵入、及び不敬罪だ』
『御意……………』

未だ泣き続ける女を、無理やり立ち上がらせて、フリードリヒは
恭しく腰を折る。

この騒ぎで、慌てて駆け付けた不寝番の兵士に女を引き渡すと、
厳しい声で命を下した。

『お前たちは一体何をしていた!?!陛下の居室への侵入者にも気づ
かずに、何をしていた!?!』

『『申し訳ございません!?!…』』

『もうよい、フリードリヒ。それよりも早くソレを地下牢へ連れて
行け、目障りだ』

『かしこまりました』

アベルはそれだけ伝えると、今度こそもう用はないとばかりに寝
室へと消えた。

そんな主の背中を見送って、フリードリヒは小さなため息をつく。おそらく、あの女の手引きをしたのは女の親である貴族か、その縁者である王宮勤めの者だろう。でなくば、この何重にもかけられた結界を破りそうやすやすと侵入することは不可能だ。

にも拘わらず、国王の居室に侵入した女。

(これは、一波乱ありそうだな……………)

がっくりと肩を落とす近衛省長官の背に暗い影が落ちていた。

侵入者・再び

貴族の情報網は恐ろしく早い。おそらく昨夜の出来事を知らない人物は、この国の貴族の中には最早いないだろう。

早朝には娘の父親である子爵が、恐怖に顔を引きつらせた真つ青な顔で平身低頭謝罪した。

女を手引きした人物はまだわかっていないが、今回はこの子爵でないことは確かであった。

犯人を探ろうと思えば探る事は容易にできた。が、アベルがあえてそれをしなかったのは、女には十分過ぎる罰を与え、その話は既に王宮中を巡っている。おそらく、女を手引きした人物にも女の受けた処罰の内容は伝わっているだろう。

その上で、さらに親である子爵に罰を与えることは煩わしい、とアベルは考えたのだろう。が、まったくの不問というわけにはいかず、子爵には娘の監督不行き届きとして、二週間の謹慎処分を下しただけだった。

そもそも、こんな煩わしい問題を引き起こす後宮自体を潰してしまいたい、それはさすがにすんなり片付く問題ではない。珍しく大

きなため息をつくくと、後ろに控えているフリードリヒの笑いを含んだ声が聞こえた。

『どうした、ため息などついて？』

『なんでもない』

それだけ言い捨てて、再び仕事を片付けようと書類に目をやった時、アベルの部屋の結界が反応した。

『まただな、アベル』

『ああ、まただ……しかもまた女だ』

今度は二人で溜息をつき、執務室を後にした。
近衛兵を数人連れ、部屋に向かう。

『灯は、ついてないみたいだな……』

『ああ……開けてくれ』

アベルの言葉に近衛兵が扉が開らく。そして暗闇の中、侵入者の気配を探った。すぐに王の寝室の違和感に気づき、そっと寝台に近づく。

そのまま、何やら膨らんでいる王のベッドの掛布をめくると、そ

こには少女が眠っていた。

珍妙な格好をした少女が、王のベットで寝ているのだ。

『……………え？』

『……………』

二人の間に冷たい空気が流れる。

『これは、いったいどういことだフリードリヒ？』

『は？いや俺に聞かれても……………』

『……………おい』

とりあえず声をかけてみるが少女に起きる様子は全くない。よくよく見てみると頬に泣いていた跡がある。何なのだろうか？

恰好からして、他国の者と考えるのが妥当だろう。だが、記憶を探ってみてもこんな恰好をする国などない。

『フリードリヒ、このような格好をする国はあったか？』

『……………さあ、俺の知る限りないな』

さらには、神の色である”黒”の髪を持つとは……

『髪の色、か』

『ああ……』

ふと、アベルの脳裏に幼い頃に乳母が話してくれた寝物語がよみがえるが、頭を軽く振って、寝ている少女へと近づいた。

『お、おいっ！…！』

慌ててフリードリヒが止めるが、アベルはなおも近づく。
ここまで近づいても全く起きる気配がない。

アベルはどうしたものと、一瞬逡巡して無造作に少女の髪の毛に手を伸ばした。色が不思議だったのかもしれない。しっとりとしたなんとも言えない感触にふと、アベルが笑みを零す。

指の間からサラサラと流れる黒髪が、やけに艶やかに映った。さらにアベルは少女の肩を揺らした。

『おい……』

少し強く揺らすと少女がうつすらと目を開けた。髪と似た黒曜石の瞳が見える。だが、焦点はあっていない、寝ぼけているのだから。ゆっくりとアベルを見上げると、胸が疼くような微笑を見せた。

「……………ユーフェリア」

そのまま、また寝息をたてはじめた少女に、アベルとフリードリヒは顔を見合わせた。女神の名を呼んだ少女。

殺気もないし、安全そうだが、どうするべきか？

フリードリヒはアベルの命令を待つ。

少しの間を置いて、フリードリヒにアベルは命じた。

『ここはもういい、俺も少し疲れたもう寝る』

『はあ？ちよっ、寝るって……………え？』

『害はなさそうだ』

『いやいやいや、何考えてんだお前!？』

『あ、い、ち、ず、ま、ん……………って、そ、う、じ、ゃ、な、く、て……………!』

『……………!』

『お前ももう休め、明日から少し賑やかになるぞ』

そういつて、サッサと寢室から追い出されてしまったフリードリヒが大きなため息をついた。

目覚めと自己紹介

目が覚めると、知らない男の腕ひとの中にいた。

未だユーフェリアの腕の中ひとにいるつもりで、すり寄ったそこでおかしなことに気づいたのだ。

ユーフェリアに胸がない。

おかしい、これはおかしい、落下している時に出会ったユーフェリアには見るからに立派すぎるほど立派な胸があったと言っのに……。

恐る恐る視線を上げると、そこには恐いくらいに整った麗貌があった。

あちらも驚いたのか、冬の湖のような瞳が僅かに見開かれている。

月の光のような銀の髪と、冬の湖を模した様な蒼い瞳の青年は明らかに日本人ではない。

「……………え、っど……………おはようございます?」

『おはよう……………』

なまじ整っている綺麗な顔に柔らかな微笑が浮かぶ。なまじ整っ

ているだけに真顔だと酷く冷たい印象を与えるその顔が、微笑む。

(うわっ、これはヤバいつて……¥¥¥¥)

外国人なのにちゃんとあいさつを返してくれたことと、その微笑に内心彼女が慌て混乱した物の、とりあえず初対面の人への基本的な挨拶を試してみる。

「は、はじめまして、冴木 漣と言います」

『サエキレン?』

「あ、えっとレン・サエキです。レンがファーストネームでサエキがファミリーネームです」

『ふむ、ではレンと呼ぼう』

「はあ、……」

そういつて、また笑顔を見せた青年に漣は微かに頬を染めた。

『私はアベル、アベル・ナイトレインだ』

「アベルさん?」

『アベルでいい』

「はぁ……………」

『その方、歳は幾つだ？』

「歳、ですか？今年で21歳になります」

理由は分からないが、聞かれた事に応えた漣。その答えを聞いたアベルが何故だか、驚いたように目を丸めた。

『……………そうか、21歳か』

「はぁ……………あのところまで……………」

言いにくそうに言葉を紡ぐ漣に、アベルは首を傾けた。

藍晶石の間と思惑

あの後、ずっと抱きしめられたままベッドに寝転がっていた漣は、何とかアベルの腕から抜け出すと、ここがどこなのか尋ねた。

アベルは一瞬、訝しげな表情をしたものの、ここがノクティス王国という君主制国家であること、今いる部屋はノクティスの首都ルーメンルーエナを中心に建つ王宮の居住区の一つだという事を丁寧に説明してくれた。

『失礼いたします、陛下。可及にお知らせしたい議がございます』

アベルの説明を聞き終え、初めて見る王宮というものに漣がひたすら感心していると、扉を叩く音と共にどこからか声が聞こえた。

『入れ』

短い言葉でどこか傲慢な態度で、入室の許可を出したアベルを不思議なものを見るような視線が射す。

『失礼いたします。たった今、神殿省長官から例の伝承についての報告がありました。なんでも近々のうちに創生神ユーフェリア様より黒髪黒瞳の贈り物が届くということだ』

陛下、これはい

『つたい？』

柔らかく波打つ金髪と深い緑色の瞳をしたその人は、一分の隙もなく着込んだ燕尾服と相まって、まるで、物語の中に出てくる優秀な従者のような風情をしていた。

その人もまた、アベルと同じく恐ろしく整った顔立ちをしている。深い緑の瞳がこれでもかと思われ、漣を凝視している。流石に口までは空いていないが、明らかにその目は信じられない物を見る目だ。

『ああ、彼女はレンという。おそらく、ヤツの言う贈り物とは彼女の事だろう』

『は、はあ……………』

二人の男性の顔を見比べ、きよろきよろと辺りを見回す漣を余所に、アベルは淡々と言葉を紡ぐ。

『とりあえず、彼女に着替えと朝食を。部屋は……………」藍玉の間』
『はっ！？いえ、しかし陛下……………』

『藍玉の間だ』

『……………仰せのままに』

知らない間になにやら話が決まってしまうたらしいことは気になりはしたものの、漣は正直それどころではなかった。

(王宮、ここが王宮かぁ……ん？確か金髪のお兄さんはアベルさんの事”へいか”って…兵か？兵家？へい……どう考えても”陛下”だよなぁ……陛下って王様に使う言葉だよなぁ……)

『どうした、レン？』

「へ？」

『ぼーっとしてる』

「はぁ……ああ、いえ、王宮って初めて見たからすごいなあって」

『……レンは王都の者ではないのか？』

「おうと？違います。東京の南麻布です」

『とっつきょう？みなみあざぶ？』

ピクリと片眉を上げたアベルを器用な人だなと感心して、漣は頷く。

『陛下、おそらくレン様は異世界よりいらっしやっただのではないかという事です』

『異世界？』

「ああ、たぶんそうですね。」

妙に落ち着いた態度でそう言い切った漣に、アベルは尋ねる。

『妙に落ち着いているな』

「ん……騒いだところでどうにもならない気がします」

『ほう……』

「ってことで、私これからどうすればいいでしょう？」

その後、金髪の執事然とした男性が呼んだ侍女に案内されて連れてこられた部屋を見て、漣は驚愕した。案内された部屋、それはテレビや映画でしか見たことのない豪華な部屋だったからだ。

出入り口となる扉にはおそらく宝石だろう、鮮やかな青い石が埋め込まれ、扉を潜ると、落ちつきはあるが明らかに高級と思われる家具が据えられた居間があり、向かって左の扉は寝室へとつながる扉、その奥には衣装部屋と水回りへと続く扉があるらしい。そして、居間の向かって右には居間よりも少し小さな部屋、それは執務室や謁見室に繋がるらしい。

「あの……本当にここに泊っていいんでしょうか？」

漣は間違いじゃないかと思い、部屋に案内してくれた侍女、セシリアに声をかけた。

「ええ、それはもう……陛下のお申し付けですし」

セシリアは優しい声で答える。

「陛下……陛下ってアベルの事ですか？」

「そ、そのようにお呼びすることは私には出来ませんが……確かに、その通りでございます」

セシリアはどこか狼狽えたように動揺する。

なるほどそういうことが、やはり彼はこの国の王なのだと思はな
つとくする。

それ以上の事は許容範囲を超えそうなので、漣は考える事をやめた。一端部屋を辞したセシリアが戻ってくるまでの間、これからどうしたもんかと考えていると、扉がノックされた。

「はい？」

漣の返事に扉が開き、セシリアが入って来て一礼した。

「失礼いたします、レン様。陛下よりお召物が届いておりますので、お支度を手伝わせて下さいませ」

漣にはセシリアの言葉の意味がわからなかった。いや、言葉自体は理解できるのだが、内容が理解できない。

「…………お召物？」

「はい。何点が届いておりますので、ご覧になれますか？」

そう言ってセシリアは居間への扉を大きく開ける。すると、その扉の向こう、漣の視界に入って来たのは色とりどりのドレスだった。その他にも小物等が並んでいる。

（なっ、あれを一人で着ると？）

痛む頭を押さえながら漣は呻いた。漣は楽観主義者ではない。面

倒くさがりな為、極力面倒な事は避ける体質ではあるものの、現実というものはわかつているつもりだ。要するに うまい話には裏がある 甘い言葉には罠がある これらの言葉を十分に理解している。

(いったい、アベルは私をどうするつもりなんだろう?)

そうこう考えているうちに、セシリアに湯浴みの用意が出来ましたと告げられ、あれよあれよと言う間にひん剥かれ、お風呂に浸けられ、身体を洗われ、気がつけば、髪も結われ、昼食の席についていた。

昼食を食べていると再度ノックの音が響き、セシリアが対応した後に扉が開かれた。部屋に入って来たのは、おそろいの服を着た若い女性が4人とかつちりとした、いわゆる軍服のような服を色違いで着た男性が二人、この二人は帯剣しているので、やはり剣士らしい。

そして6人よりは少し年上の、朝方アベルの部屋であつた男性が入ってくる。7人はそのまま漣の傍まで来ると、深々とお時儀をし、やはり年長者らしき金髪の男性が少し前へ進み出て来た。

『先ほどは失礼いたしました、レン様。私はこの王宮で侍従長を務めます、レイナード・ビーンと申します』

そう言つて、更に深くお時儀をした後、顔を上げた。柔和な雰
囲気の中に、知性と鋭さを湛えた深い緑の瞳は真つ直ぐに漣の瞳を
射抜いた。

「は、はい、」丁寧にありがとうございますベーンさん
『レン様、どうか私の事はレイナードとお呼びください』

「へ？あ、はい」

レイナードは漣の返事にニコリと微笑み頷く。

「それでは、この者たちを紹介致します。アディ、エイダ、キャリ
ー、アシユリー前へ」

その声にまだ年若い女性、4人が前へ進み出る。

『この者達は今日より、レン様付きの侍女となります、左からアシ
ユリー、エイダ、アディ、キャリーにございます』

レイナードの紹介と共に、4人は頭を下げる。

「レン様、アシユリーと申します。これからどうぞよろしくお願

致します」

濃い青髪の娘が挨拶した後、少し金髪というよりも蒲公英色の髪と桃色の髪、そして橙色の髪の女性がそれに続く。

「エイダと申します。レン様にお仕えでき、大変光栄でございます。どうぞ何なりとお申し付け下さい」

「アディと申します。若輩者ですが精一杯おつかえますわ」

「キャリーです。よろしくおねがいします」

侍女4人の挨拶が終わると、入れ替わるように剣士二人が前へ進み出て花の足元に跪く。

「この者達は、レン様の護衛を務めます、オーガストとコンラットにございます」

二人の剣士は跪いたまま右手を胸にあいさつをする。

『オーガスト・コネリーと申します』

濃い茶色の若者が先に挨拶を述べる。

「コンラット・マクベスと申します」

少し朱色がかった金髪の若者が挨拶を終えると、二人はそのまま後ろへ数歩下がり、立ちあがると扉まで移動し、直立した。

そうした7人の挨拶の間、漣はただポカンとしていたが、ハツと我に返り、レイナードに問いかける。

「あの……これはどうしたことでしょう？」

『レン様をご不自由を感じられないようにとの、陛下のご配慮です。それでは、私はこれにて失礼致します。何かございましたら、この者たちにお申し付け下さい』

一礼して扉に向かうレイナードを漣は慌てて止めた。

『はい？どうかありませんか、レン様？』

「あの、ア……陛下にお会いしたいんですが」

『でしたら朝議が終わり次第、陛下はこちらにお見えになるそうですので、もうしばらくお待ちください』

そう言って、部屋を出ていくレイナードの後ろ姿を見送って、漣

は小さく肩を震わせた。

いったい自分はどつなるのだろっ？と……。

求められるもの

『へ、陛下っ、お待ちくださいませ、陛下!!』

フリードリヒを従え、午前中の執務を終えたアベルが漣の元へ向かうべく、広い廊下を歩いている時だった。

ブクブクと太った身体に、ありったけの贅を凝らしたような衣服を纏った中年男が駆けてくる。夏でもないのに、その額には玉のような汗が浮かんでいる。

『へ、陛下っ、王宮内にて実しやかに流れております、噂についてお伺いいたしたく……』

『噂?』

『は、はいっ。なんでも今朝方、陛下自ら藍玉の間に姫を迎えられたとか……その上、昨夜は陛下のお部屋で共に過ごされたと』

『ああ、そのことか……ずいぶん情報が早いな』

男の言葉を断ち切りアベルは見る者を深く魅了するような微笑を浮かべた。

『は、はあ、それは、その……たまたま……』

内務長官は真つ青な顔をして、しどろもどろに言葉を重ねる。それでも何やら意を決つしたのか更に言葉を継ぐ。

『……藍玉に迎えられた姫君は、いったいどちらの姫君なのでしょうか?』

それは、今や貴族のほとんどが知りたくて仕方ない疑問だった。要するに誰の息が係っているのか、それを彼らは知りたいのだ。

『その方が、それほど気にすることでもないと思うが?』

言い切ったアベルに、内務長官は力なく俯いた。が、それでも何やら意を決したようにさらに言葉を紡ぐ内務省長官。

『お恐れながら、陛下……藍玉の間は、ご正妃様のお部屋となる場所。そこに入られました姫の事を、陛下の忠臣たる我々が存じ上げないと言つのは……僭越とは存じますがなにとぞお教え下さりませ』

(まあ、忠臣かどうかは別として……そりゃそうだわな……)

アベルの後ろに控え、事の成り行きを見守っていたフリードリヒはちらつとアベルの様子を窺った。アベルがこの状況を楽しんでいるのは間違いない。

『 名を ” レン ” と申す。気高く美しい娘だ。未だ王宮には慣れぬ身ゆえ、皆に迷惑をかけると思うが許せよ 』

それだけを言うとアベルは早々に踵を返した。

有無を言わさないその態度に内務省長官はそれ以上の追求を諦めるしかない。

アベルが立ち去ってしばらくした後、慌てて己の執務室に舞い戻った内務省長官が部下や家人たちにすぐに、藍玉の姫の素性を調べるように命じた。この驚くべき現実には、翌日には貴族という貴族が漣の素性を知らうと躍起になるのだった。

漣が二杯目の紅茶を飲んでいる時、藍玉の扉がノックされた。

扉の内側に立っていたコンラットが対応している。

オーガストは扉の外側に立っているらしく、セシリアはアディたちでテキパキとした指示を与え、何やら忙しそうに立ち回っている。セシリア以外の侍女と兵士が増えた今、藍玉の間にいるのは漣を含

めて8人だった。

しかし、漣はどうすればいいかわからず、気まずい沈黙が続いていたのでただひたすら黙って紅茶を飲むしかなかった。

『レン様、陛下が起こしになれましたが、いかがなさいますか？』

コンラットが柔和な笑みを浮かべ漣に尋ねる。

「も、もちろんお通ししてください」

漣の言葉を受け入室したアベルとフリードリヒに貴婦人らしく挨拶をした。

「ご機嫌麗しく恐悦至極にございます、国王陛下・フリードリヒ様」

その姿に、二人は驚いたように目を丸めた。以前、テレビで見た某、オリウツドの映画で中世ヨーロッパの恋愛模様を描いた物で、主役の貴族令嬢役の女優がこんなあいさつをしていたのを真似てみたのだ。

『あ、ああ、ありがとうございます。どうか、何か困ったことはないか？』

気を取り直したアベルが形通りの挨拶を返す。

「はい、おかげさまで。たくさんの衣装や装飾品をありがとうございます、
いました、陛下」

そう答えた後に、ふと、自分がこの部屋の主あることに気がき、
ソファへと二人を勧める。ソファに腰を落ち着けたアベルと、相変
わらずアベルの後ろに立つフリードリヒの方へ向きお茶でいいかと
問いかけ、肯定をもらうと側に控えていたアシュレーにお茶の用意
をお願いする。

ここまででは完璧なはずだ。

緊張した様子のアシュレーがお茶を淹れてくれ、それをアベルに
勧め連は三杯目となるお茶の入ったカップを形ばかり口に付ける。
少し落ち着いたところで話を始めた。

「陛下、このような素敵なお部屋をご用意下さり、ありがとうございます
います」

その言葉にアベルは頷き、気にすることはないと言う。

「とじろで……」

漣はどう切り出すべきか一瞬逡巡したが、率直に疑問をぶつけることにした。

「このような、過分なお引き立てはなぜでしょう?」
『何故、とは?』

アベルの鋭い視線を漣はまっすぐに見つめ返した。そして、自分の中にあるある考えを言ってみせたのだ。

『なるほど……』

漣の予想は当たりだった。が、アベルとしてもここでその通りだと認めるわけには行かない。

『……一目惚れだと言っただら?』
「なかなか面白い冗談です」

『一目惚れは信じないか?』
「すみません、リアリスト現実主義者で」

『りあ……まあいい』

キツパリ言いきる漣に、アベルはフツと笑らった。

『随分はつきり言い切ったな』

「そうですか？私は思ったことを言ったままでです」

『思ったこと？』

「ええ、あなたはそこまで愚かではないでしょう？」

『……一目惚れは愚かか？』

「アベルの今の行動の理由がそれなら……」

『ふむ……』

アベルの瞳が光る

「正直に教えてください。貴方が私に望むことを」

漣の言動に、正直二人は驚いていた。

(この娘、少しばかり賢いだけか？あるいは………)

「わかった、正直に話そう。私が君に望むのは

」

漣は静かにアベルの言葉に耳を傾けていた。

お姫様じっこ

何となくそんな気はしていたけれど、やはりアベル自身の口からはっきりと聞くと、驚いてしまう。どうして彼はそんな事を言い出したのだろうか？彼のその容姿からどう見ても、女性に困っているようには見えない。

(自慢じゃないけど、私みたいな十人並みの娘を相手にしなくてもいいのに)。

驚いて固まっている漣を見て、満足そうに笑ったアベルだった。

『正妃と言っても、本当に正妃にと望んでいるわけではないから安心してほしい。まあ、どうしても抱いて欲しいというのなら、私もやぶさかではないが……』
「け、結構です!..!」

驚きながらも漣は、アベルの言葉をキツパリと拒絶した。それにまた、楽しそうにアベルは笑う。

『表向きだけとは言え、私の正妃になるからには色々と苦勞をすると思う。部屋と装飾品の数々はそれに対する対価だと思ってくれ』

そう言って、アベルは微笑んだ。

(対価ねえ……)

「あの、仰ることはわかりました。つまり仮初の正妃として振る舞えという事ですね？」

『 ああ 』

「要するに、周りに牽制するためなんですね？」

『 その通りだ 』

そこまで聞いて漣は次の質問をするか、少し躊躇した。あれだけ飲んだのに喉が渴き、紅茶を口に含む。一瞬の間を置いて、漣は思い切つて聞いてみる。

「そして、私は命を狙われる可能性があるんですね？」

その言葉に二人は驚嘆した。漣に護衛をつけたのは、もちろんその可能性が十分に考えられるからだ。だが、本人に指摘されるとは思いもしなかった。

『 あくまで、念のためだ 』

「念のため、ねえ……………」

花は考え込むように呟く。

「私の護衛をして下さるのは、二人だけですか？」

『怖いかな？』

護衛を増やして欲しいゆえの発言だとアベルは思った。

「まあ、ええ、それはやっぱり怖いです。だけど、命を狙われるかも知れない私の護衛となると、一日中ずっと付かなければいけないですよ？なのに二人だけというのは、やはり負担が大きいんじゃないでしょうか？」

かなりの射た質問には、今までずっと黙っていたフリードリヒが答えた。

『もちろん、二人だけですと到底無理です。ただ、急な事でしたので周辺のしっかりしている者を選ぶ時間がなく、とりあえずあの二人は間違いないので近衛隊から急遽選出しました。もちろん、侍女たちについても保証はできるから安心してください』

『もちろん、すぐに警備の補充は行うつもりだ』

アベルの言葉に、漣は頷く。

「お手数をおかけ致します」

そう言って頭を下げた漣に、二人の男は苦笑する。

『いや……寧ろ、こちらの都合で危険に晒してしまう事を謝らなければならぬ。ここにいる間、出来るだけの事はするつもりだ。何か望みがあれば何でも言っただけでいい』

「ありがとうございます。もう十分ですにさせていただきます」

『うむ、実際そなたに護衛が付くのは昼間だけだから……六人もいれば十分だろう』

「昼間だけ？」

アベルの言葉に漣は首を傾げた。ふつう夜の方が危険なのではないだろうか？彼女の疑問はもっともだった。が、その疑問はすぐに解決した。

『夜は私と閨を共にしてもらうのだからな』

「はぁああああ!？」

漣は勢いよく立ち上がった。そのはずみにテーブルが倒れ、アベ
ルが紅茶まみれになるのも構わずに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9970y/>

睡蓮の花

2011年12月11日07時50分発行